

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Collection of Baskets from Southeast Asia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坪郷, 英彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004548

国立民族学博物館所蔵の第一次東南アジア稲作 調査団採集のカゴ細工について

坪 郷 英 彦*

A Collection of Baskets from Southeast Asia

Hidehiko Tsubogo

This article analyses the bamboo baskets collected by the First Southeast Asia Rice Crop Research Team, and which are now in the collection of the National Museum of Ethnology. They were collected in Thailand, Laos and Cambodia.

The following technical aspects of the baskets are examined: form and framework, weaving method, and the manner of stripping the bamboo in preparation for weaving.

Data are presented graphically by line drawings.

The baskets are similar in form, weaving method and quality of bamboo. Most are finished by a method similar to Nodaguchi Shiage. The baskets can be divided into two groups; those high in quality and minutely woven, and a roughly woven group.

- | | |
|-------------|---------------|
| I. はじめに | 2. タイのタケカゴ |
| II. 標本資料の分析 | 3. カンボジアのタケカゴ |
| 1. ラオスのタケカゴ | III. 若干の考察 |

I はじめに

この報告は昭和53年度国立民族学博物館共同研究員として行なった同館収蔵庫での資料調査をまとめたものである。

日本のタケカゴ細工についてはすでに系統だった研究が行なわれているが [中村 1977a: 847-867, 1977b: 172-195, 1977c: 351-376, 1977d: 605-631, 1978: 806-

* 山口県商工指導センター

827],他の民族がつくり、使うタケカゴについてはほとんど研究の行なわれていない状態である。幸い収藏品の中に第一次東南アジア稲作調査団の収集したタケカゴ類があり、それに接する機会を得たのでできるだけ詳細な観察を行ない、タイ・ラオス・カンボジア地域のタケカゴの特長を抽出することを試みた。

本来は現地での製作工程及び使用方法の聞き取り観察を通じた上でないと厳密な把握はできない。しかしここではその不足を承知の上で、できるだけタケカゴを細かく調べ全体及び部分が語りかける多くのことを記録し、またできるだけわかりやすく表現することを心がけた。つくり方つかわれ方をはなれ、もの(ここではタケカゴ)自体が持つ形態及び細部詳細の記述の積み重ねで、その地域の物質文化のラフスケッチは可能だと考える。

観察は次のことを中心に行なった。

1. 全体的な形態と構造(剛性・耐久性を受け持つ部位はどこか)について
2. 各部位の編み方について
3. 竹ごしらえについて(編み竹の形状と寸法)

まとめ方は個々のカゴについては文章による記述とともに、三面図的な図示を試みた。これまで二次元的な表わし方はいろいろ試みられたが[中村 1973: 67, 73, 77, 79, 81, 90, 92, 1975: 219-232],ここではある程度わかりやすく、かつできるだけ多くのことを表示できる方法として、基本的な製図法である三面図を参考に少し変則的な展開表現を行なった。

おおむね図は次の基本にそって書くこととした。

1. 概形を一点鎖線で示す。
2. 展開は側面を中心に上に縁部分(円形であれば半分だけを示す)、下に底部分を示す。
3. 個々の竹の太さは省略し、基本的には同じ太さの線で示す。
4. 詳細が必要なものは破線で引き出し示す。
5. 胴編みなど同じ編みの繰返しの部分は一部だけを示し省略を行なう(したがってザル目編みなどは回し竹の本数にこだわっていない)。

タケカゴの各部位の編み方の呼び方は日本のタケカゴ細工の系統的研究²⁾で使われているものにしたがい[中村 1978: 823],特異なものについては参考のためにお話をうかがった山口県田万川町のタケカゴ職人の示した呼び名を用いた。この個所には*を付して他と区別している。

なお、ふつう日本では野田口仕上げとは縁竹の間にササラ竹を入れて仕上げた縁仕

上げのこと [中村 1978: 823] を示すが、ここでは内外からあてた縁竹で仕上げたものを野田口仕上げと呼ぶことにし、ササラ竹の有無にはこだわらないことにした。また素材としての竹の種類もここでは判別が不可能なので単に竹として表わし、他の籐・木などと区別するだけにとどめた。

第一次東南アジア稲作調査団採集の標本資料にはここで取り上げたものの他に、魚を入れるビクのようなもの、室内で使うような小ものの類があるが今回は省くことにした。また機会があれば編み方など複雑で興味をひかれるものがあるので別にまとめたいと思う。

Ⅱ 標本資料の分析

1. ラオスのタケカゴ

例1 [標本番号] 33847 [名称] 籠 [採集地] ラオス国 Sawae (Pakse 西方)

円口方底の物入れカゴで最大幅が 660 mm 高さが 500 mm の大きなものである。縁のやや内側に収まる蓋がついている。

底は幅 16~20 mm 厚さ 1 mm 程度の身竹 2 本を 1 束とみたてての四つ目編みである。一目の大きさは 2 cm 角でかなり荒い編み方がしてある。

力竹として幅 17 mm 厚さ 5 mm の皮竹が底面の対角線状に十字に入れてある。四つ割りにしたものか、断面が円弧状をしている。また底の四周にも力竹が井の字に入れてある。これは幅 11 mm 厚さ 7 mm の皮竹で、両端は厚さ 2 mm 程度に薄くして折り曲げ、胴の回し竹に 10 cm 程差し込んで止めてある。

胴はザル目編みで、回し竹は 12~18 mm 厚さ 1 mm 程度の荒い竹へぎの皮竹で編み上げてある。この回し竹は断面が円弧状のものを開きながら編んでいったようで、中央に 1, 2 本の割れ目が走っている。

縁から下 9 cm のところから縁までは、幅 9 mm 厚さ 2 mm の皮竹 3 本を二つ跳ね一つくぐりで一つずつずらせ、かつからませながら編んだツナ編み* である。ザル目編みの回し竹自体が皮竹でしかも幅が広く厚さも厚いためかなりの強度を持っているが、さらにこの縁付近のツナ編みで強さを増している。

縁は立ち竹の先の繊維をほぐし、ねじ曲げながら折りかえし、回し竹に差し込んで止めてある。

籐で編んだ把手が二つついている。全体が大柄な割には小さなものだが、よく観察

例1

標本番号 33847
 名称 籠
 採集地 ラオス国
 Sawae (Pakse 西方)
 採集者 八幡一郎
 採集日

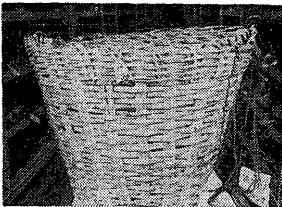
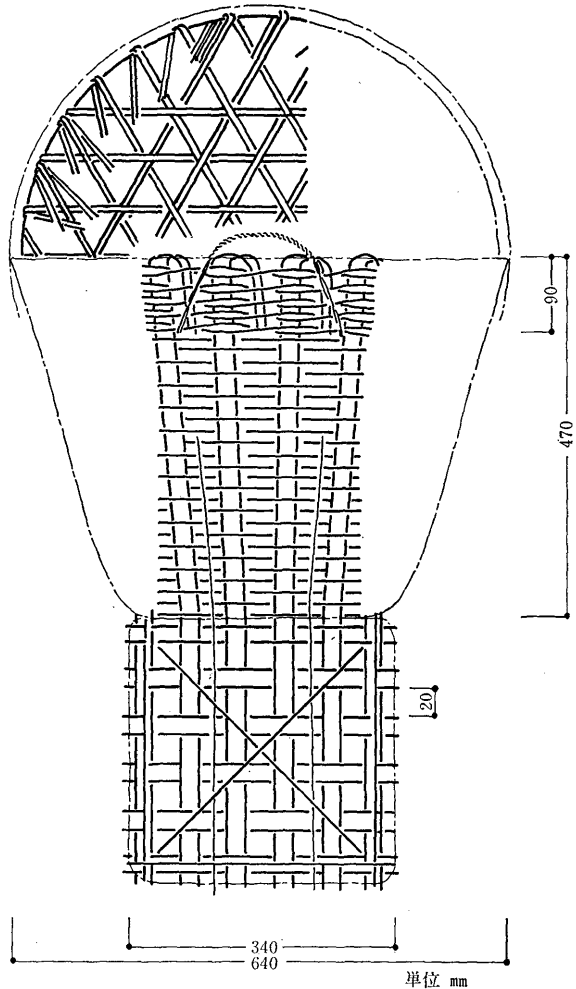


図 1



すると籐の柔軟性をよく生かし、幾重にも胴に編み込んで充分な強度と耐久性を持たせている。断面形状からみると四つ割りにしたような幅 8mm 厚さ 6mm の籐 2 本を、まず約 9cm の間隔で平行に底と力竹の間に通し、胴にそわせて縁から下約 18cm のところで内側に通し、縁までくると互いに 4~5cm の円弧を描くようにねじりながら交叉させ重ねる。さらに胴にそわせて下ろし、ちょうど回し竹の編み方がかわる縁から下 7~9cm のところで内に通し、再び上に上げ先ほどのねじりながら交叉させた把手になる部分に両側から巻きつけてゆく。そしてその先は再び胴を通して同じように巻くかあるいは縁近くで結んで止めてある。結局 2 本だけの籐を使ったものだが何度も交叉させたり巻いたりして充分な強度を持たせるようにしてある。

蓋は直径が約 60 cm の円形で、皮竹と身竹でつくられており、わずかに内蓋の感じであまり縁に収まる。編み方は幅 15 mm 厚さ 1 mm の身竹と幅 10 mm 厚さ 1.5 ~ 2 mm の皮竹を 1 束とみだして三つ目をなす六つ目編みで、一目は一辺が約 3 cm の三角形である。縁は幅 10 mm 厚さ 5 mm の皮竹で輪をつくりこれにそって三つ目で編んだものの端を折り返し編み目に差し込んで止めてある。この縁を回る皮竹はその両端が止めてない。全体の荒さのわりには蓋のおさまりがよく、蓋を作る際どのようにその直径を決めてゆくのか興味もてる。

今回は取り上げていないが全く同じつくりでやや大きさの小さいカゴ〔標本番号〕33758)がある。これには蓋はなく、作りはややいいである。

例 2 〔標本番号〕33942 〔名称〕籠 Gaper 〔採集地〕ラオス国プロバン高原

口の径が 340~350 mm、高さが 565 mm の円口方底のザル目編みのカゴである。底には木製の台がついている。全体が幅 4 mm 厚さ 1 mm の皮竹でつくられており、すべて面取りが施されている。特に回し竹は内側も断面で見るとなめらかな円弧状に削ってあり、ていねいに作られているカゴであることがわかる。

底は幅 4 mm 厚さ 1 mm の皮竹 2 本を 1 束とみだしての一目が 12 mm 程の四つ目編みで、これに幅 10 mm 程度の身竹を口の字に回して目つぶしとしている。そしてこの底面に力竹として幅 7 mm 厚さ 3 mm の身竹が対角線状に十文字に入っている。

これらの底編みの上に高さ 50 mm 厚さ 6 mm のラワンと思われる木の台が取り付けられている。この板は四隅はあらかじめ切り込みを入れて折り曲げられ、四角の一边で両端を重ねて 2 カ所をちょうど曲げ物の接合のようにして籐で止めてある。底の編竹との接合は、わずかに曲線を描いている底の縁の面にぴったり合うように木を円弧状に削り、幅 6 mm の太い籐を一旦、底と板との間に回してその上から各辺 3 カ所づつ幅 3 mm の籐でかがって固定してある。

胴は面取りをほどこした皮竹のザル目編みで、立ち竹が皮竹であることとあいまって、ひじょうにしっかりした作りとなっている。

胴の下から 38 cm 程のところには 2 カ所、長さ 28 mm 程の半円形の耳が付けてある。素材はわからないが何かを芯にしてその上を細い籐でていねいに巻いたものである。底の木の台にも耳と同じ面に 2 カ所 10 mm 程の四角い穴があけてあり、おそらくこの木の台の穴と胴についた耳に紐が通され、頭にあてて担うようにしたものと考えられる。

例 2

標本番号 33942

名 称 籠

Gaper

採 集 地 ラオス国

プロバン高原

Ban Thateng

Pak Song (部落)

採 集 者 江坂輝弥

採 集 日 昭和32年12月 4 日

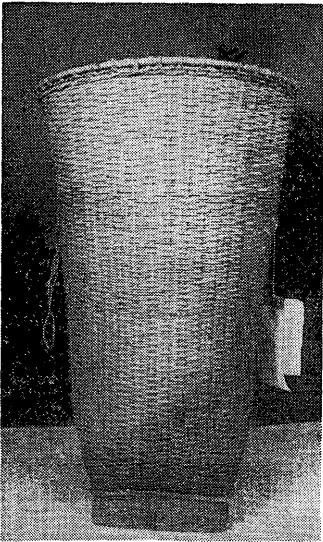
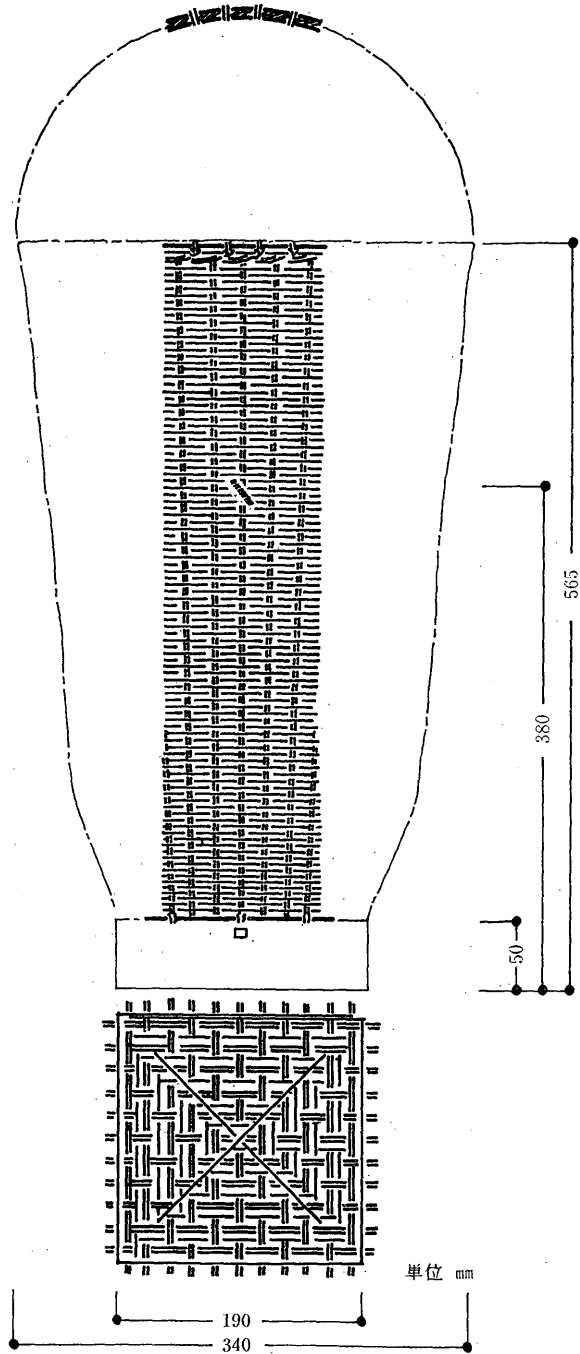


図 2



縁は太さ 8mm の丸竹を二つ割りにしたものを内外にあて、籐でかがった野田口仕上げである。ちょうどこの縁竹の端が重なる部分は互いに斜めにそぎ落してあり、ちょっと見ると継ぎ目がわからないようにしてある。この内外の縁竹の間に隠れてよくわからないが、胴編みの末端の処理の仕方は立ち竹をねかせてねじるようにして再び立ち竹をかかっているように見える。

例3 [標本番号] 33837 [名称] 背負籠 Kapa [採集地] ラオス国プロバン高原

口の径が 330mm 高さが 490mm の円口方底のカゴである。全体が幅 4mm 厚さ 1mm の面取りをほどこした皮竹で作られている。かなり荒っぽい作りで、また相当各部分がいたんでおり実際に使われていたものと思われる。

底は皮竹 2 本を 1 束とみたてての四つ目編みで、一目の大きさは約 2cm 角である。また力竹として幅 17mm 厚さ 4mm の断面が円弧状の皮竹を底面の対角線状に十字に入れている。

胴の編み方は特徴的で、今回の調査資料の中で他に例を見ない。底で四つ目を編んだ皮竹は、2 本 1 束でそのまま立ち上り立ち竹となるが底から約 10cm のところまでは同じ皮竹のザル目編みである。そしてこれから上は 2 本いっしょだった立ち竹が互いに離れるように 60° ずつ左右にふられ、またザル目編みで編まれてきた回し竹は 1 本だけ上にそれて、すぐに 1 本同じ皮竹がそえられ 2 本いっしょに上下幅が 35~37mm の間隔でラセン軌道を描いて上昇し、左右にふられた立ち竹とつくる六つ目編みのための回し竹となる。ザル目編みから六つ目編みに移るところで少し無理があるようで、少し縦長の六つ目となっており不揃いでもある。これは立ち竹を 60° 程左右に開くときどうしても竹にゆがみが生じ、そこに生じる元にもどろうとする力を間隔の広い回し竹では完全に止められないためであろう。

縁下 10cm のところから再びザル目編みとなり、立ち竹は下の方が 2 本いっしょだったのが今度は 1 本ずつとなる。斜めに上ってきた立ち竹を垂直にもどしながら回し竹を編んでいるが少し斜めになっており、したがってザル目も不揃いになっている。

竹という素材の性質からみれば煩雑な作業をとまなう胴の編み方だが、用途から考えて胴を全部編み竹でつぶす必要がない場合は強度・軽さの点から六つ目編みが合理的となる（例えば四つ目編みにすると水平・垂直の線構成だからずれが生じやすく、又様々な方向から加わる力にも弱い）。

縁は共縁仕上げで、その編み方は図 3 のとおりで、1 の立ち竹の先を折り曲げ、2・3 の間を通して表に出し、裏に回しながら 5・6 の間を通して表に出し、6・7 の間

例3

標本番号 33837
 名称 背負籠
 Kapa
 採集地 ラオス国
 ブロバン高原
 採集者 八幡一郎
 採集日 昭和32年10月27日
 Kha 族使用

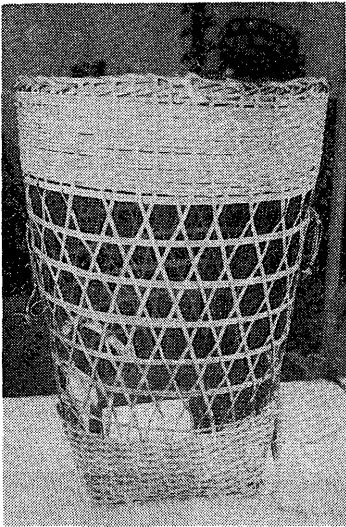
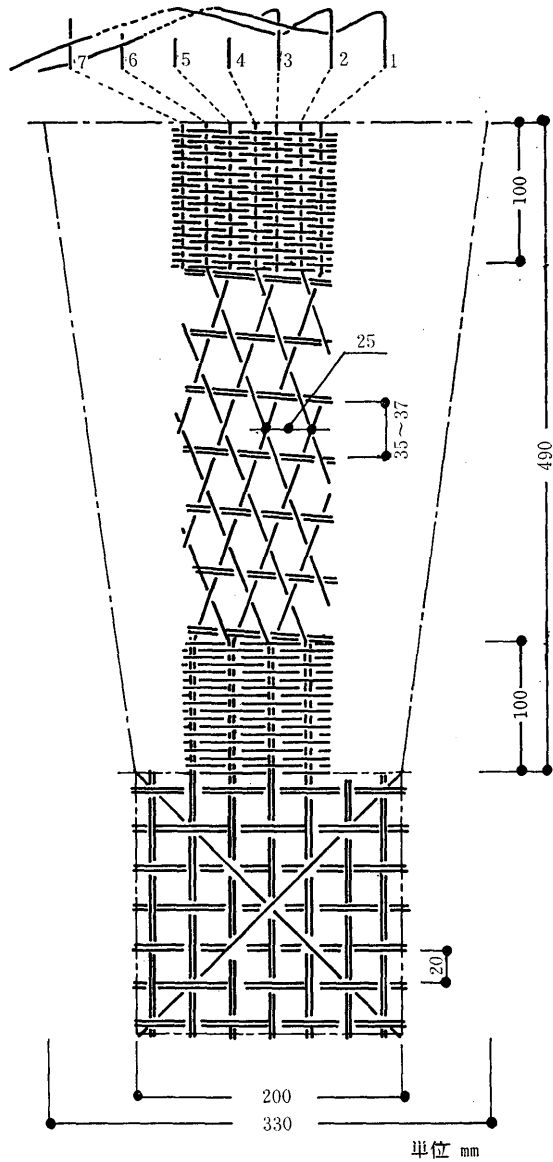


図 3



を通して裏に出して終る。簡単な縁仕上げのためか、あるいは長い間使われていたためか、かなりの部分がほつれたり折れたりして立ち竹の先端だけになっている部分も多い。全体的にきゃしゃで粗野なつくりのカゴで、強度的な配慮としては、胴のザル目編みと皮竹を使っていることだけである。これらのことからかなり軽くかさばるものの運搬に使っていたことが想像される。

負い緒をつけるために木のつるを巻いてつくった耳が縁下15cmのところにも2カ所ついていて一方はすでにほつれている。また底近くのザル目編みのところにも目にそうように木のつるをかけた耳がある。やはり縁近くの耳と同じ面に2カ所つけているが、片方には木の皮がついており、この皮を負い緒としてたぶん頭にかけて用いたと考えられるが確かでない。また縁近くのザル目編みの部分を縦に細い木のつるが5, 6回荒く巻かれている。縁・胴編みのほつれを補修したものと思われるがはっきりはわからない。

例 4

標本番号 33936
 名 称 籠
 Katimon
 採集地 ラオス国
 Tran Ninh
 Xieng Khouang
 Phonsavan
 苗族
 採集者 江坂輝弥
 採集日 昭和32年11月23日

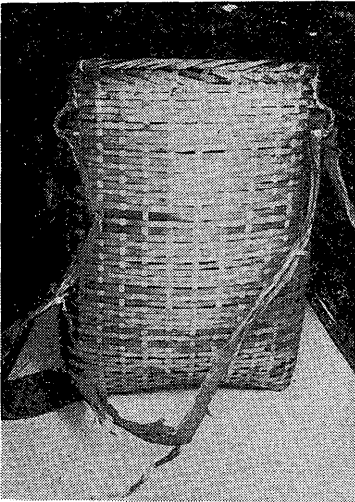
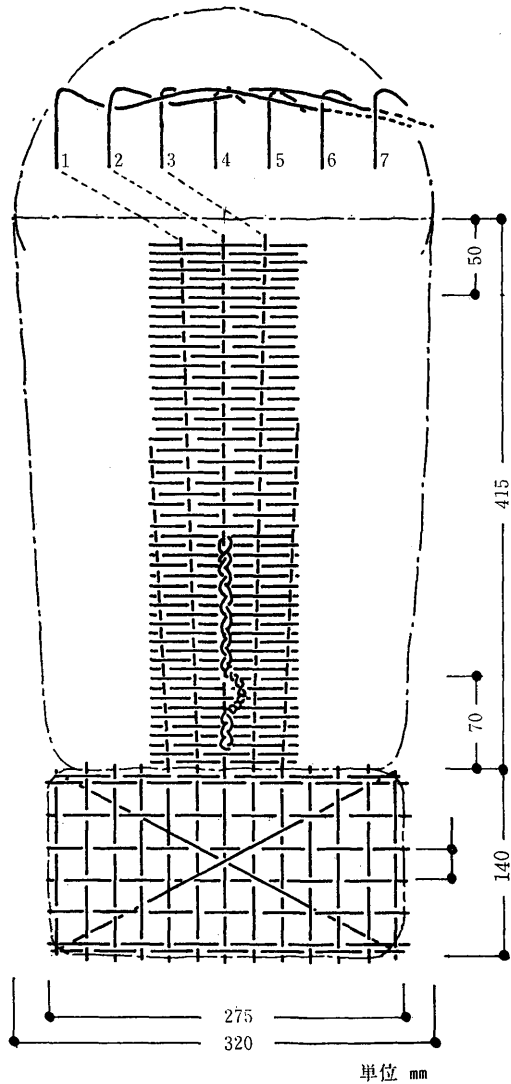


図 4



例4 [標本番号] 33936 [名称] 籠 Katimon [採集地] ラオス国 Tran Ninh
Xieng Khouang, Phonsavan (苗族)

円口長方底のザル目編みの背負いカゴである。口の径は 320mm 高さは 415mm で、底が 140mm×275mm の長方形をしているため口はやや楕円形をしている。全体が 5~8mm の薄手の皮竹と身竹で構成されており、きゃしゃで素朴な感じを受ける。

底は1目が2cm 角ぐらいの四つ目編みで皮竹が用いてある。また、長方形の対角線状に幅 12mm 厚さ 4mm の身竹が力竹として入っている。底編みの竹が立ち上る部分に幅 5mm の身竹が回してある。これは、この腰立てに移る際の底編みの仮止めの為と考えられる。

胴はザル目編みで、回し竹として縁下 5cm までと底から 7cm までは皮竹が使われ、残りの中央部分は身竹が使われている。カゴを手にとり、いろいろな方向から力を加えてみると、縁近くと底近くの皮竹のザル目編みによって強度を持たせていることがわかる。このことは胴中央部の編み方こそ異なるが例3の標本資料にもあてはまることである。

縁仕上げを見ると、これも例3と同じで、巻き口仕上げに見えるが実は立ち竹を折るかえし縁仕上げに利用した共縁仕上げである。

縁近くに2カ所、その反対側の底近くに1カ所籐で編んだ耳がついている。この編み方は上下からそれぞれ1本ずつの籐を編んでゆき、中央3cm程をあけて縄状に編んでブリッジをつくったものである。三つの耳には帯状の木の皮が通してあり、これを頭にあててカゴを担ったことがわかる。

2. タイのタケカゴ

例5 [標本番号] 33726 [名称] 手提籠 [採集地] タイ国 Chumpong

胴部分の高さが 185mm 幅が 335mm の円口六角底の手提のついた籠である。全体を幅 6mm 厚さ 0.5mm の皮竹と身竹で構成した小さな三つ目からなる六つ目編みである。身竹と皮竹は 3:1 の割合で使われている。

底面に幅 15mm 厚さ 2mm の皮竹が力竹として、水の子に入れてある。皮のついた側を内側にして、また力竹を差し込む部分の底の編み竹はあらかじめ抜いて編んである。

底の縁は底面の保護のために巻き縁仕上げのようにかがってある。これは底・胴の編み竹とは別に付け加えられたもので、まず底・胴の編み竹と同じ幅と厚さの竹を胴

例 5

標本番号 33726
 名称 手提籠
 採集地 タイ国
 Chumpong
 採集者 八幡一郎
 採集日 昭和33年1月5日

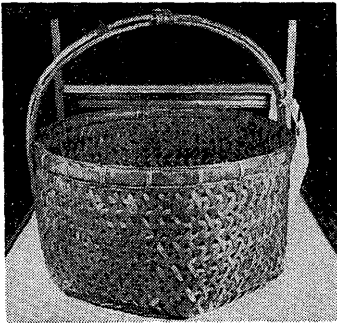
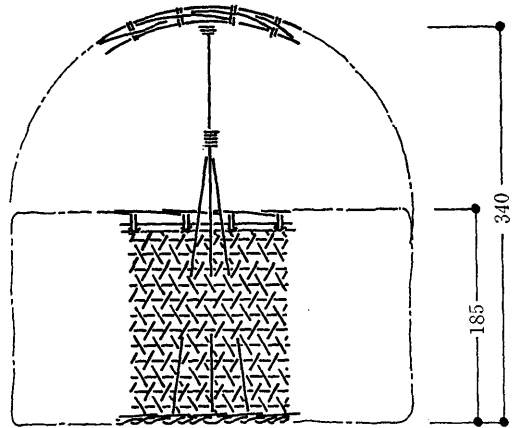
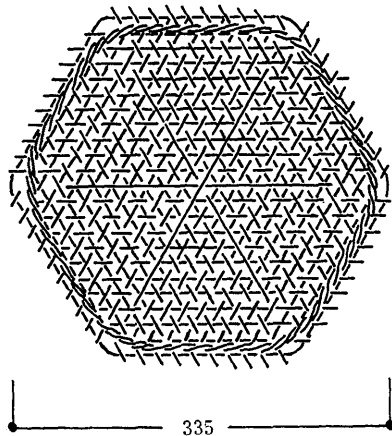


図 5



単位 mm

編みの左下がりの竹一つおきに差し込んで、胴から左下に向けて竹をつけ出す。次に 1mm 角の細い竹でザル目編みのようにしてこのつけ出した竹を固定した上で、芯になる竹を縁にそうように回す。そして、これにつけ出した竹を折り曲げて一応固定し、その上から幅 2mm 厚さ 1mm の細い皮竹を巻き縁のようにして巻いた、たいへん手のこんだものである。

縁は幅 14mm 厚さ 3mm の縁竹を内外からあて、細い皮竹でかがった野田口仕上げである。内外の縁竹の間のすきまは 2mm 程のヒゴ竹 3本で縁竹のかがりを二つ跳ね一つくぐりで編んであり、装飾としてとらえたほうが良いと思われる。

手提の部分は籐が用いられている。幅 20mm 厚さ 8mm の断面が円弧状のもの 1本と、その内側に幅 10mm 厚さ 5mm のもの 2本を組み合わせたもので、手提の中央すなわち頂点と、縁から 50mm のところの合計 3カ所で 3本の籐は結びつけられ

ている。3本の籐のうち細い2本の籐は縁に接する付近から左右に振られ、三つ足となって胴の編み目に差し込まれている。それぞれの先は幅5mm 厚さ1mm程に細く削られ、胴の編み目に通しやすくしてある。その固定の仕方は、一度胴の内に通した先を外に出し、再び底近くで内に入れ、左右の籐は六つ目の編み目にそってそれぞれ左上右上に三つ跳ね三つぐりで編んであり、中央の籐の先は底に回して止めてある。

全体をみて、胴編み・底の縁編み・縁仕上げなどから手の込んだ丹誠な作りであることが感じ取れ、また縁に回したヒゴ竹や手提部分のかがりなどの装飾もさりげなく加えられたような素直さを感じられ、日常生活のために作られたもののもつ用と美を兼ね備えたカゴといえる。

例6 [標本番号] 33622 [名称] 籠 [採集地] タイ国バンコック市内

口の径 500mm 高さ 185mm 底の一辺 200mm の口の広い平たい円口方底のカゴである。

底は幅 15mm 厚さ 0.5mm の身竹を使った四つ目編みで、力竹として幅 15mm

- 例6
 標本番号 33622
 名称 籠(角底)
 採集地 タイ国
 バンコック市内
 採集者 江坂輝弥
 採集日

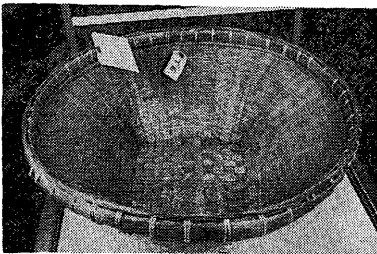
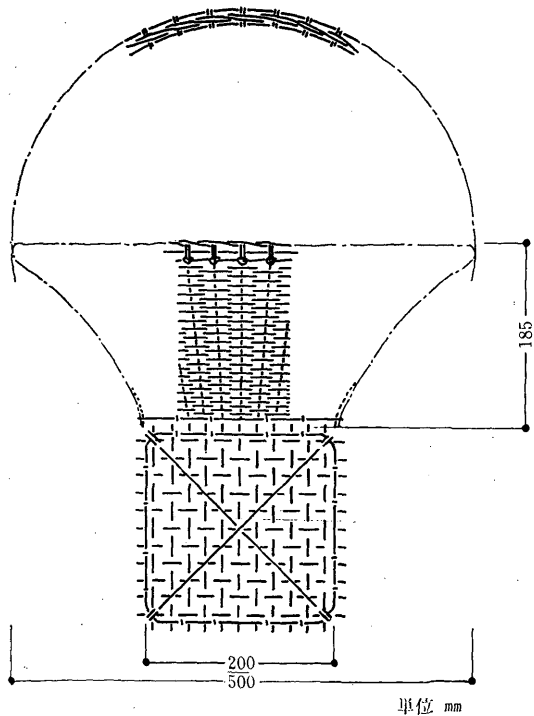


図 6



厚さ 3mm の皮竹が対角線状に入れてある。また底の四隅には、節の部分を利用した足が 2 本 1 組として 15mm 程突き出している。これは胴の立ち竹として底編みの竹を腰立てしたものとは別に、底の各四隅から放射状に 4 本ずつ添えたもののうち 2 本に節のあるものをあらかじめ用意し足として突き出したものである。

底面の四周には幅 7mm 厚さ 4mm の二つ割りの籐が回してあり、細い籐の皮でかがり、底に固定してある。

これらの加工の様子をみると、底面の保護・補強に相当の注意をはらっていることがわかる。

胴は幅 2.5mm 厚さ 1mm の身竹のザル目編みで、立ち竹は底竹の立ち上ったものに加えて底の四隅にあたる部分に底竹の半分程の幅の竹が 4 本ずつ加えられ、底の大きさに比べて口を充分広くするための伏線としている。

縁は野田口仕上げで、幅 23mm 厚さ 5mm の表皮をナイフのようなもので削った皮竹を内外からあて、幅 3mm の籐で約 35mm ごとにかがってある。立ち竹の端はどのように処理されているか縁竹の下に隠れてわからないが、縁竹をかがる籐を縁竹の下側に通す際、立ち竹を二つ割りにした間を通すようにしている。

縁の上面の内竹と外竹の間は、例 5 と同様な手法で編んである。

カゴの内側の胴と縁との接点に幅 7mm 厚さ 3.5mm の竹が何の固定もされずただ竹自体の反撥力を利用してはさみ込んである。

底面のていねいな加工、太いヒゴ竹を使ったザル目編み、太くて厚い竹を使った縁仕上げなど、頑丈なつくりである。特に、縁と底には、保護と補強という意味からの配慮がうかがえる。

例 7 [標本番号] 33751 [名称] 量籠 Krabung [採集地] タイ国 Rat Buri

口の径が 435mm 高さが 310mm の円口方底のカゴである。胴・底に多くの力竹が入り、しっかりした、また繊細なつくりのカゴである。

底は幅 8mm 厚さ 0.5mm の身竹を二つ跳び二つぐりのアジロ編みで、よく見ると 4 本おきに 2 本、色の違う身竹（染色してあるかどうかは不明）が編み込んであり、また底面を四つの柵目を切るように入れられた力竹に対称となるように編み目を変えてある。

底面には多くの力竹が入れてある。対角線状に幅 8mm 厚さ 6mm の角を丸くおとした身竹が 2 本、底面を四つの柵目に切るように底中央から胴にわたる幅 12mm 厚さ 2mm の身竹 4 本、そして、底の縁にそって井の字にわたし、端を折り曲げ 2

例7

標本番号 33751
 名称 量籠
 Krabung
 採集地 タイ国
 Rat Buri
 採集者 八幡一郎
 採集日 昭和33年1月7日

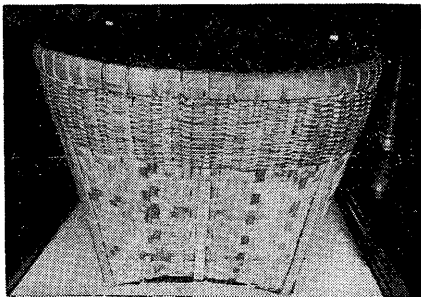
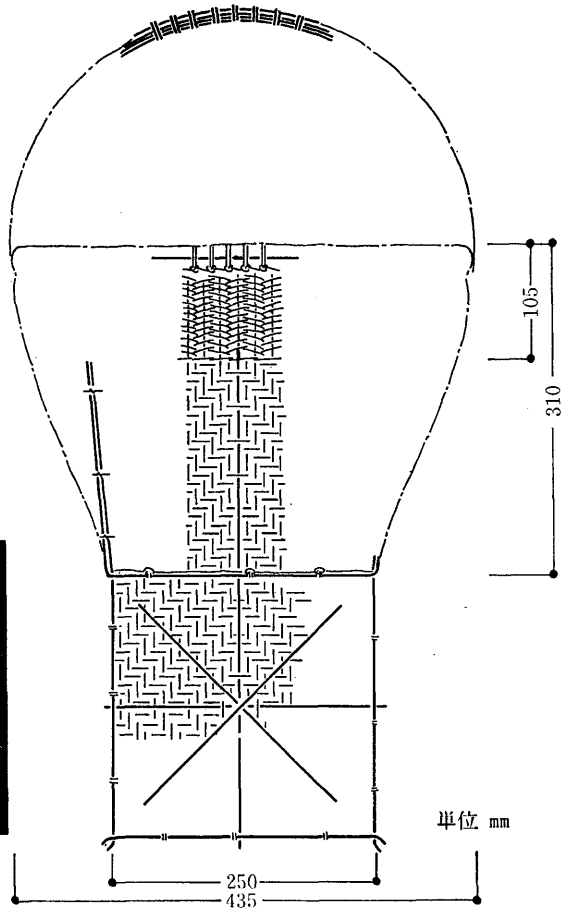


図 7



本ずつを籐で結び、胴の稜線をかたちづくる幅 15mm 厚さ 3mm の表皮を削った皮竹 4 本の大小合計10本の力竹が入っている。いずれも先端は先細にして、アジロ編み・ナミ編み* に差し込んであり、また胴の稜線をなす力竹の折り曲げの部分は厚さが 1mm まで薄く削ってある。アジロ編みは剛性が全くないため、その補強の意味で多くの力竹が使ってあると考えられる。

胴は縁から下 10cm までは底から立ち上げた身竹のアジロ編みで、やはり底と同じような編み目のパターン、色違いの身竹の使用がみられる。

縁下 10cm のところから縁までは、まず幅 1mm のヒゴ状の身竹 3 本で五つ跳び三つぐりてひとまわり編んでアジロの止めとし、次から同じ寸法の竹 3 本で、三つ跳び一つぐりをつつづらせながら編んでゆくナミ編み* という編み方で縁まで編んである。縁は幅 24mm 厚さ 6mm の表皮を削った皮竹を内外からあて、間に幅

6mm の丸い籐を入れて上から幅 2mm の籐の皮でかがった野田口仕上げである。この籐のかがりはかなり正確に 25mm おきにしてあり、胴を通すところをみてゆくと、立ち竹に当たるところは立ち竹を二つ割りにし、割れ目に通しているのがわかる。

このカゴの特徴は、剛性を持たせるための竹及び編み竹と、装飾を加味した、ものを入れる機能を満たす編み竹とがはっきり分かれていることである。これまで見てきた標本にもおおむね該当することだが、構造的な側面からみると、縁仕上げ及び縁付近と、底面及び底付近にしっかりした強度を持たせ、その間を胴編みで継ぐという基本形式が考えられる。そしてこのカゴはアジロ編みの部分をとり除いてみると明らかのように縁仕上げとそれに続くナミ編み*に、底及び胴の力竹で形づくられるフレームが組み込まれるという構造が見えてくる。こうした基本的なエレメントを備えた上で、ものを入れるという機能を満たし、かつ自由なパターンを展開できるアジロ編みの部分をはじめ可能となる。

このようにして見てゆくと、このカゴを編む時の竹ごしらえ、加工工程などの計画性がうかがえる。籐も含めて少なくとも7種類の異なった竹をあらかじめ用意し、パターンを考えてのアジロ編み、力竹の挿入、ナミ編み*、縁仕上げが高い密度の編み目とこまやかな細工で進められている。量産さらに分業によるカゴ作りも推測できるが、いずれにせよ形態・構造ともに長い間生産され使われてきた一つのタイプということが考えられる。

例8 [標本番号] 33754 [名称] 天秤籠 Khu Krachad ham [採集地] タイ国 Rat Buri

全体が幅 8mm の身竹を使った六つ目編みのカゴである。天秤棒で担うための長い籐の紐のついた一對の円口六角底のカゴで、口の径が 480mm 高さが 160mm と平たい形をしている。

底には幅 10~14mm 厚さ 2mm の皮竹 3本が水の字に力竹として入れてある。また底の縁の外側には幅 7mm の二つ割りにした籐が回してあり、内側にはやはり幅 10~14mm 厚さ 2mm の皮竹が六角形の辺に添って入れてあり、力竹としている。

胴には幅 10mm 厚さ 2mm の身竹が底の各頂点から縁に向けて胴編みを挟むかたちで内外に入れてあり、力竹としている。この力竹は底面より 2, 3cm 長く突き出しており、直接底が地面に接するのを防いでいる。

縁は、幅 15mm の四つ割りにしたような断面が円弧状の皮竹を内外にあて、細い籐で 10cm ごとにかがった野田口仕上げである。そして、内竹と外竹のすきまは、

例 8

標本番号 33754
 名 称 天秤籠
 Khu Krachad ham
 採 集 地 タイ国
 Rat Buri
 採 集 者 八幡一郎
 採 集 日 昭和33年1月7日

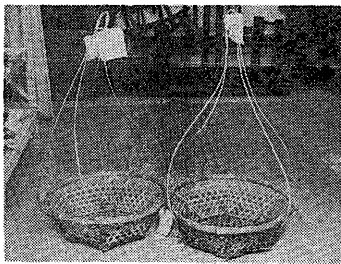
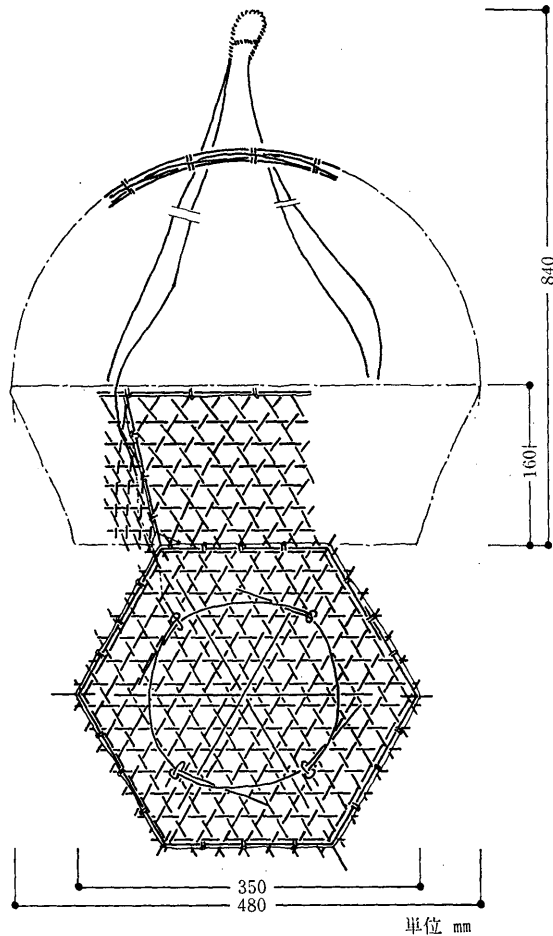


図 8



例 5, 例 6 と同じようにヒゴ状の竹で編んで塞いであるが、この場合は 2 本の竹で籐のかがりを一つ跳ね一つぐりで編んである。

天秤棒にかけるための籐の紐がついているが、強度をもたせるため 2 本のループを底面で継ぎ合わせ、底面全体の力を受けるように工夫した継ぎ方となっている。これを模式的に示すと図 9 のようになる。実際の製作工程とは一致しないかもしれないが、説明のために仮に a 点をループ A の起点とすると、①を通過して②で結び、一胴を通過して上に出て天秤棒にかける O 点でもう一本のループ B と籐の紐で結ばれ、下に降りて③で結んで②を通り①で終る。同じようにしてループ B の起点を b とすると④を通過して①で結び、胴を通過して上に出て O 点でループ A と籐で結ばれ、下に降りて④で結んで③をぬけて終る。各①～④の 4 点は、一方のループの結び目を他のループが通

ようになっているわけで、これは底面にできた輪で底面全体の荷重を受け、さらにその力が均等に四つの結び目から天秤棒へ伝わるよう工夫されていることがわかる。

全体が身竹の六つ目編みだからひじょうに軽くできている。しかし、強さ、耐久力に対する配慮も充分うかがえ、胴、底の太い力竹とそれがかがる籐で底面を補強し、これにかかる力を上述のとおり籐のループで作った底面の輪で受け天秤棒に伝えるように作られていることがはっきりわかる。

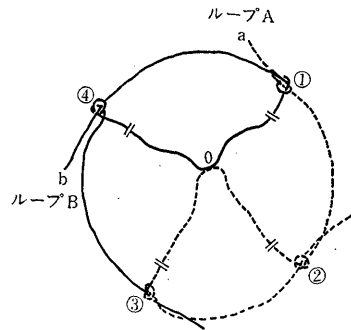


図 9

例9 [標本番号] 33787 [名称] 魚取籠 Prakon [採集地] タイ国

その名が示すとおり、魚を取るためか底面が半球形で口の直径が490mmの大きなカゴである。口の半径とカゴの高さがほとんど一致しており、その全体の形からも作る際に型枠を使っているのではないかと考えられる。

例9

標本番号 33787
 名称 魚取籠
 Prakon
 採集地 タイ国
 採集者 八幡一郎
 採集日 昭和33年1月14日

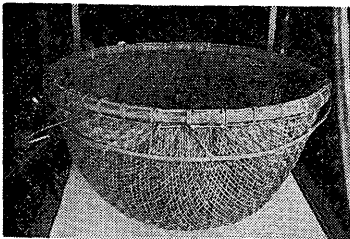
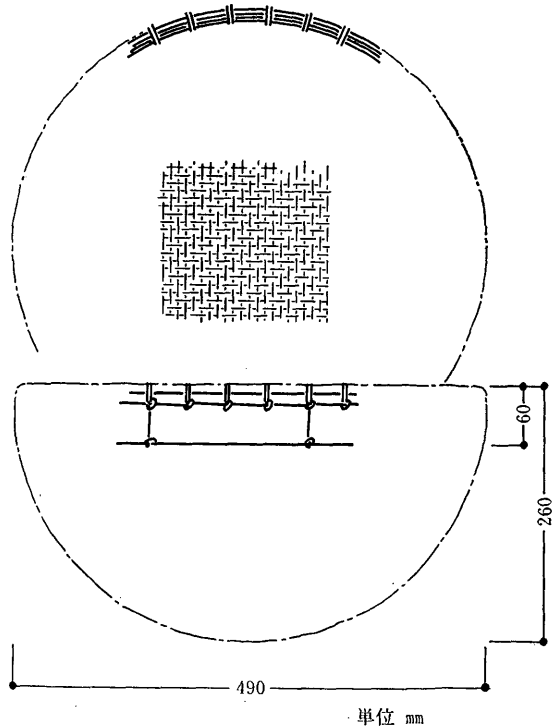


図 10



単位 mm

半球形の胴の部分の編み竹は、節のふくらみがそのまま出ていることから、普通の皮と身を分ける竹へぎを横とすると、縦にへいだものであることがわかる。幅は1.5~4mm厚さも1mm前後ではらつきがあり、仕事の荒さが目立つ。編み方は、一見四つ目編みのように見えるが、よく見ると目透かしの二つ跳び二つぐりのアジロ編みである。球形に作るため底は目の整ったアジロであるが、縁に近づくにつれだんだん歪ませてあり、ちょうど縁の4点から広がった波紋が干渉をおこしたような編み目となっている。縁付近では5~6mmの少し幅広の竹が用いてあり、目のずれを防ぐことと補強の役目をしている。

縁は、幅15mm厚さ6mmの皮竹を内外からあて、間に幅4mm厚さ1.5mmの籐をはさんで細い籐の皮で4cmおきにかがった野田口仕上げである。この縁竹の外側の竹は表皮をナイフのようなもので薄く削ったあとが残っており、内側の竹はただエッジを丸くしてあるだけでそのような跡はみられない。単なるすべり止めのためなのか、竹の性質から曲げる際表皮が弾くのをさけるためか、あるいは皮竹の強さを持たせながら身竹に見せようとしたものなのか、はっきりわからない。

縁から6cm下ったところにはやはり皮竹の表皮を削り、エッジを落した幅6mm厚さ4mmの竹が一本縁に平行に胴にそって回してある。

縁をかがる籐を、かがり目の三つ~六つおきに下に降ろし、この竹と胴を固定してあり、一見すると縁から吊り下げられたように見える。これは縁近くの胴編みの竹に幅広のものが用いられていることと同様、縁近くの補強のためとみられるが、いずれにせよこのカゴの使用法がわからないためはっきりしない。

今回は取り上げなかったが、このカゴと類似した標本〔標本番号〕33655)がある。これは胴編みの竹として薄い身竹が用いられ、やはり二つ跳ね二つぐりのアジロ編みである。

例10 〔標本番号〕33979 〔名称〕背負籠 Gaper 〔採集地〕カンボジア国 Stung Treng

口の径380mm高さ400mmの円口方底の背負い紐のついたカゴである。底及び縁のかがり方、細い皮竹を編んだ背負い紐の末端など装飾的に凝っている。また胴の回し竹、縁竹には面取りが施してあり、こまやかさにあふれた作り方が伝わってくる。

底は幅15mmの薄手の身竹で二つ跳び二つぐりのアジロ編みである。力竹として幅10mm厚さ6mmの身竹が方形の底の対角線状に入れてある。また、底の縁に

例10

標本番号 33979

名称 背負籠

Gaper

採集地 カンボジア

Stung Treng

採集者 江坂輝弥

採集日 昭和32年12月5日

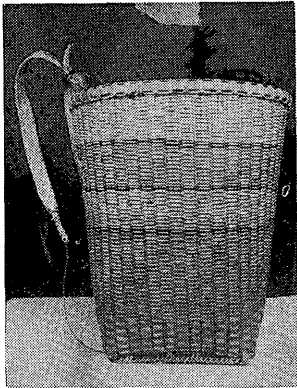
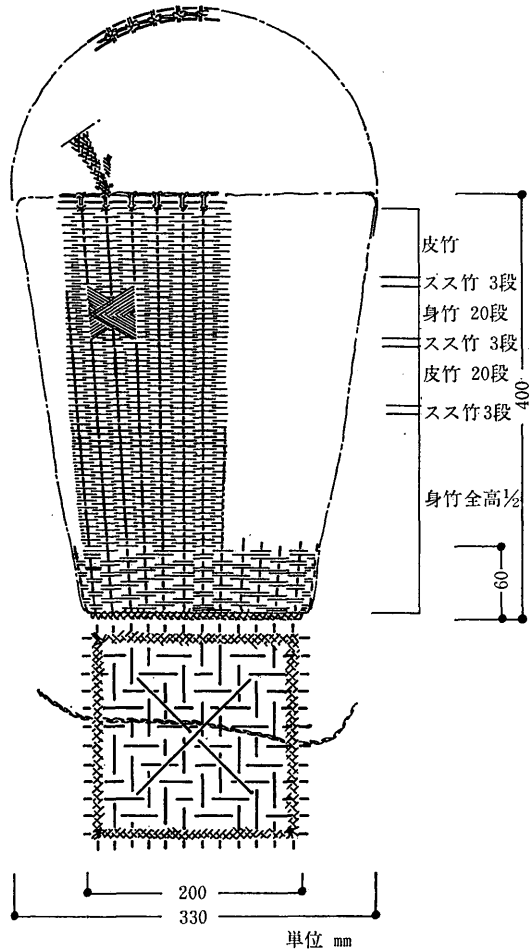






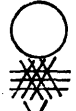
図 11



そして幅 9mm の身竹を井の字に入れ、それぞれ端は胴の回し竹に差し込んで止め、さらにその上に幅 7mm の竹を口の字に回し幅 5mm の身竹でかかった二重の力竹が入れている。

胴は、底から 6cm ぐらいのところまでは幅 2mm の身竹を用いたアジロの一種のアヤ編みで、その上はすべてザル目編みである。このザル目編みの部分も全高の $\frac{1}{2}$ までが身竹、その上 3 段が煤竹、さらに順に 20 段が皮竹、3 段が煤竹、20 段が身竹、そして皮竹と変化をつけて編みである。幅は 2mm と細く、しかもエッジを丸くとした面取り加工を施し、皮竹、煤竹、身竹の異なったテクスチャーと色彩を利用し、また編み方を変えるなどの変化をみると、繊細で装飾性の高い（かといって決して華美ではない）ものを作ろうとした意図がはっきりわかる。

表1 タケカゴの諸データ

標本番号	概形	口径・底径・ 高さ (mm)	プロポーション		底編み	胴編み	縁仕上げ	竹ごしらえ (幅×厚サ)	構造	特徴
			口径・高 サ	口径・底 径						
例1 33847	円口方底	640・340・470	1:0.8	1:0.5	四ツ目 ○	ツナ ザル目 ●	ねじり縁	16~20×1 12~18×1 9×2 17×5		<ul style="list-style-type: none"> ・蓋付き ・把手が二つ ・仕事が荒い
例2 33942	円口方底	340・190・565	1:1.7	1:0.6	四ツ目 ●	ザル目 ●	野田口	4×1面とり 10×— 7×3 8×—		<ul style="list-style-type: none"> ・頭でかつぐ ・底に木台
例3 33837	円口方底	330・200・490	1:1.5	1:0.6	四ツ目 ○	ザル目 六ツ目 ○	共縁	4×1面とり 17×4		<ul style="list-style-type: none"> ・頭でかつぐ ・胴編みに特徴
例4 33936	円口長方底	320・275× 140・415	1:1.3	1:0.9 (長辺)	四ツ目 ○	ザル目 ●	共縁	5~8×— 12×4		<ul style="list-style-type: none"> ・頭でかつぐ
例5 33726	円口六角底	335・335・185	1:0.6	1:1	六ツ目 ○	六ツ目 ○	野田口	6×0.5 15×2 2×1 1×1 14×3		<ul style="list-style-type: none"> ・底縁が別につく ・縁・把手に装飾 ・ていねいな作り

例6 33622	円口方底	500・200・185	1:0.4	1:0.4	四ツ目 ○	ザル目 ●	野田口	15×0.5 15×3 2.5×1 23×5 7×3.5	<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		<ul style="list-style-type: none"> ・縁に装飾 ・大柄だがしっかりした作り
例7 33751	円口方底	435・250・310	1:0.7	1:0.6	アジロ ●	アジロザル目 ナミ編み ●	野田口	8×0.5 6×8 12×2 15×3 1×1 24×6	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>		<ul style="list-style-type: none"> ・力竹が多い ・アジロにパターン ・ていねいな作り
例8 33754	円口六角底	480・350・160	1:0.3	1:0.7	六ツ目 ○	六ツ目 ○	野田口	8×0.5 15×5 10~14×2	<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>		<ul style="list-style-type: none"> ・天秤棒でかつぐ ・長い簾のヒモがついている ・ひじょうに軽い ・縁に装飾
例9 33787	半球形	490・—・260	1:0.5	—	—	アジロ ○	野田口	1.5~4×1 5~6×1 15×6	<input checked="" type="checkbox"/>		<ul style="list-style-type: none"> ・変ったかたち ・目透しのアジロ ・縁付近に補強
例10 33979	円口方底	330・200・400	1:1.2	1:0.6	アジロ ●	アヤ編みザル目 ●	野田口	15×1 10×6 9×— 7×— 5×— 2×1面とり 8×—	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>		<ul style="list-style-type: none"> ・胴編みに装飾 ・背負いひも有り ・縁に装飾 ・ていねいな作り

○ 目透かし ● 目つぶし □ 身竹 ■ 皮竹 ▣ 表皮を削った皮竹

縁は野田口仕上げで、幅 12mm 厚さ 2mm の表皮を薄く削った皮竹を内竹・外竹に用い、その上を幅 2mm の薄い皮竹でかがってある。立ち竹の末端には割れが入れてあり、その割れ目にかがり竹を通して胴と縁を固定している。さらにこのかがり竹の方法を詳しくみると、そのかがり目の節からは縁竹の上と下の両方から同時にかがって見えているように見えるが、実際は一本のかがり竹で処理しているのであって縁竹の上を通るかがり竹は全くの装飾であることがわかる。

背負い紐は幅 3mm 程度の細い皮竹12, 3本をアジロに編んで、幅 2.5cm のベルト状にしたものでできている。ちょうど肩にあたる部分だけアジロ編みで底に近づくとつれて先細になり、底との継ぎには、細い三つ編みの紐が使われている。ベルト状の縁の部分の折り返しの部分は体に接しない側でひとひねりして返してあり、折り目をつけないことで柔軟性と耐久性を持たせ、かつ肩へのあたりをやわらげるといった使うことへの配慮を汲み取ることができる。

この竹で編んだ背負い紐の上端は、ベルト状から袋状に編み方が変わり、胴の内に回して縁下約 6cm のところで胴に固定され、さらにその端は袋状に編んだものの中を通して外に出し、昆虫の触角のようなかたちにまとめて止めてある。この胴との接合部の外側の編み方、及び袋状に編んだ中を通しての端末の処理は、強度・耐久性にあわせて装飾性を強く意識した加工法といえる。

Ⅲ 若干の考察

これまで観察してきたことをまとめると表1のようになる。

まず気をつくことは、肩で背負ったり、頭に紐を当てて担ったりする背負いかゴは、他と比べて縦長の形をしていることである。例2[標本番号] 33942, 例3[標本番号] 33837, 例4[標本番号] 33936, 例10[標本番号] 33979 がこれに該当するが、口径が 330mm 前後、高さが 500mm 前後と背中にちょうど収まる値を示しているのも特徴的である。また身竹を多く用いたザル目編みが主流で、できるだけ軽くしてある。縁仕上げは他のカゴと比べて簡単であったり、(共縁仕上げは背負カゴだけに見られる) 細い竹を使っていたりであり強度的な配慮はみられない。したがって、背負いかゴの類の特徴として、背負い紐の末端あるいは紐を通す耳をとりつける胴編みをザル目編みにして、胴全体でカゴの強度を保つような作り方が挙げられる。

胴編みは背負いかゴにザル目編みが多いことの他は、いろいろな編み方が行なわれている。これは個々のカゴの用途との関係がありそうで、ここではこれ以上立ち入れ

ない。

縁仕上げは野田口仕上げが多い。日本のタケカゴの場合は、内竹・外竹の間にササラ竹を入れるのが普通だが、ここではそうした例は全く見られず、類似したものとして籐を間に入れたものがあるだけである。そのかわり、内竹・外竹の間をヒゴ状の竹で編む縁かざりのようなものが多く見られ、野田口仕上げの基本的な手法と考えるとよいと思われる。またこの野田口仕上げでは、背負いカゴの類を除いて、かなり幅広の竹を縁竹にしているのが特徴で、持ち手も兼ねる縁に十分な強度を与えようとする意図がうかがえる。

縁、胴にさりげない装飾が加えられているものが多い。先述の野田口仕上げの縁かざり、皮竹と身竹を組み合わせた胴編み、意識的に多くしたと思われる籐のかがりなど、けっして華美でなく、実用のための役目を兼ね備えた装飾とでもいえるようなものが随所に見うけられ、カゴを質の高いものにしている。

また、胴編みの竹に面取りを施したものが多い。日常生活に使うカゴに、加工工程からいえば一つ手間が増える面取りの仕事をごく一般的に行なっていることは、日本のカゴ作りではむしろ工芸品に多い加工であることを考えると、日常生活のためのものづくりに対する姿勢について多くの示唆を与えてくれる。

皮竹の表皮をナイフのようなもので削った処理が数例見られる。主に野田口仕上げの縁竹に多い。はっきりした意図はわからないが、例えば例7〔標本番号〕33751では縁竹とともに力竹にもこの処理の竹が使われており、強度的な面よりも身竹を使った胴編みとの調和をとるための処理と考える方がよいと思われる。

装飾、面取りの有無、編み方のていねいさなど加工の面からカゴ全体をみると、荒もの*と呼んでよいと思われる粗野なつくりのカゴと、質の高いていねいな作りのカゴの2つのグループに分けられるようだ。それは、例えば背負いカゴの類を取り上げても、例3〔標本番号〕33837、例4〔標本番号〕33936の荒いつくりのものと、例2〔標本番号〕33942、例10〔標本番号〕33979のていねいなものとの二つに分けることができる。これが地域的な差を示すものか、また日常生活の中でカゴの使い分けが行なわれているのか、ここではわからない。

個々のカゴでは、ふつう日本では見られない編み方、形のカゴが確かめられた。胴編みに六つ目とザル目を組み合わせた例3〔標本番号〕33837と目透かしのアジロで底のない半球形をした例9〔標本番号〕33787がその好例である。一見どちらも奇異な感じを受けるが、その用途を考え合わせてゆくと合理的な編み方と形を備えたものだと理解できる。

謝 辞

今回のまとめを行なうにあたって、デザイン畑の門外漢に基礎からいねいな指導をして下さった中村俊亀智教授（国立民族学博物館第4研究部）にまず厚く感謝申し上げます。

また国立民族学博物館共同研究「うつわ班」のメンバーの方々には、その研究発表・ディスカッション、収蔵庫の調査のすべての場面で多くのご教授・示唆を受けた。個々の名まえを記すことはしないが、ここで改めてお礼申し上げます。

最後に、何度も訪問しカゴ作りの仕事の手をわずらわせた、山口県田万川町の中島善磨氏には、カゴ作りに携わる中での意義ある多くのことを教えていただいた。末尾ながら心よりお礼を申し上げます。

文 献

中村俊亀智

- 1973 「六つ目の仲間たち」『季刊人類学』4 (1): 66-93。
- 1975 「民具研究法」『民具資料調査整理の実務』 柏書房。
- 1977a 「東北地方のタケカゴ細工の基調——日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (1)——」『国立民族学博物館研究報告』1 (4): 847-867。
- 1977b 「関東地方のタケカゴ細工の展開——日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (2)——」『国立民族学博物館研究報告』2 (1): 172-195。
- 1977c 「中部地方タケカゴ細工の諸相——日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (3)——」『国立民族学博物館研究報告』2 (2): 351-376。
- 1977d 「近畿地方のタケカゴ細工——日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (4)——」『国立民族学博物館研究報告』2 (3): 605-631。
- 1978 「中国地方タケカゴ細工の一側面——日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (5)——」『国立民族学博物館研究報告』2 (4): 806-827。